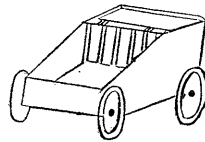


以上の調査から、傾向や問題をつかんで四月に入園児を迎えた。そして子どもの動きを観察すると同時にいろいろな方法を試み、扱ってきたわけである。

## 生命感を深める試み

松井田鶴子



そしてこの経過のうちに「特に考慮した点」は机のグループ構成と遊具についてであった。

### ひよこの乳母車

生れたてのひよこは実にかわいいもの。早春の町でひよこの声を聞くと、子どもたちはたまらなく欲しくなります。買ってきて、箱に綿を敷いたりこたつに入れたり、一生けんめいに的はずれの世話をするうちに死んでしまう。泣き悲しむ子、困る母親。こんなことは春先にはよく見受けま

す。  
私どもの園では、飼育材料にこの初生雛

を取りあげてみました。普通の育雛箱に四輪をつけ、ひよこの乳母車を作りました。

これは子どもたちの手で、らくに移動できることを考えたからです。電球にあたためられた箱に入れると、ひよこの鳴き声はしずまり、やがて小さいあしを伸ばして安眠します。

「ひよこは鳴くものとはかり思っています。寒が、寒い寒いと訴えていたんですね。」と死因に思いあたるお母さんもありました。園にも失敗がありました。便が肛門からは

なれなくなり、日ごとに一羽、二羽ずつ小さい生命が消えるのを、ただ、おろおろした年。原因は熱の与えすぎと知って後悔を噛みしめました。最初の一、二年はお墓ばかりできて困りました。今年八年目。お墓とは縁が遠くなっています。

乳母車は天候によって、日なたから木かげに移したり、屋内に入れて風雨をよけたりします。まな板と小さな庖丁を用意して、子どもたちに菜をきぎませたり貝がらをくだいて与えたりさせます。ひよこの口の大きさを、よく見て刻むこともおぼえま

す。  
中びなになると、普通の鶏舎に移してやります。秋から産みはじめ卵は、子どもたちが順番に家へいただいて帰ります。布の袋の中に登山用卵ケースを入れ、それに納めて、肩にかけていきます。翌朝もどってくる容器の中に、押麦など、にわとりさんへのおみやげが時どき入っています。こうした経験を重ねるうちに、電球で育てるのは幼稚園向きでないと感じはじめま

した。母鶏の羽に抱かれて育つのを観察させたい、巢についた母鶏を手にいれて

「ひよこのかあさん コッコッコ。」

のうたを実感をこめてうたえるようにしてみたい、と準備しています。

白色レグホンは子どもをつついたり、おどろき易いので不向き。プリモスロックか交配種が適当しています。各種類を揃え方が便利。

## 兎を抱く子

兎の仔は生れたては、ひよことはちがって無気味な形です。生後三日ほどたつてから、箱のカーテンをあげて子どもたち、静かに見せます。やわらかい白いわたの中に、赤い仔がごろごろ重なり合っている姿は、兎よりは豚をおもわせます。子どもたちは目を見はって

「あれ なに？」

「うわあ、ずいぶん小さいね。」

兎のお母さんが胸の毛をぬいて、自分で綿を作って赤ちゃんを保護するには、お

とも子どもも、しんとして見入りました。

兎の仔の成長は実にめざましいもの。数日で白のビロードに似た毛が生え、ダブダブのシャツを着てるみたいに這いまわりまです。まだめくらです。しかし、はね上る力は、ちゃんと備わっています。

生後十日から十五日で赤い目を開くと、急に兎のかわいさを見せはじめます。この頃から生後二か月くらいまでが、幼稚園児のあそび相手に最適の時期になります。

子どもたちは、今五匹しかない仔兎を抱きたい一念で、朝も登園時刻が早くなります。自分に抱かせてくれないという訴えが再々あります。

「ジャンケンで順番をきめなさい。」

「時計の長い針が次の字までいったら、次の人にかけてあげなさい。」

こうして毎日抱かれて育つと、兎の方も訓練されて、背中におんぶされてもおとなしくしています。時々おしっこをかけられる子もできます。

幼稚園の子どもが帰った後、時どき小学

生が抱きにたち寄ります。この方はあそび方も荒くてひやひやさせることもあり、反面、観方もこまかくなっています。抱いたひとり

「ア、ドキドキしたら。」

と叫びますと、皆が胸に手をやって

「こわいのかね。」

「すべり台からおろすのはやめよう。」なんて、話し合っていることがあります。

兎の餌は、成長につれておどろくほど必要になります。家の台所から出る野菜くずを、子どもたちは運んできてたべさせます。早く陽春になれば、園の東の野道に兎をつれてつみ草にいこう。クローバーやよめ菜をもりもりたべさせてやりたいと春が待たれます。

兎の仔は冬から春にかけて二回ないし三回産ませます。仔は希望する家庭に分けて飼いつづけます。やがて成長しきって兎屋に出す時がやってきます。その頃になると、どうしても出すのを承知しないから幼稚園へ返すという家もできてきます。

愛育の心と生産の必要とが一致しなくなります。動物飼育にはいつもこの問題が起きます。結論的な言い方をすれば、幼児期には愛育の面を大きくとりあげたいと考えます。

## あげは蝶の誕生

蝶を飼っていた時も、家庭から同じような質問を受けました。自分の家では柚の木につく虫を退治している、ところが子ども話では、同じ虫を飼っているという、そんな害虫をなぜ飼うのですか——という質問でした。また、他の家からの訴えは、おじいさんが桜毛虫を焼こうという、子どもは焼いてはいやだという、間に入ってお母さんが困っているという、これは難問題でした。結局、園で飼っているねらいを話して、害虫駆除は登園して留守の間におとなの手でもらった——と受持ちの先生は語っていました。

庭のゆず・さんしょう・からたちについて青虫を自然の状態でみるのが一番望まし

いのですが、鳥にたべられますので、枝のまま部屋の飼育箱に移しました。頭でっかちの青虫はどう見てもかわいいという形ではありません。ゾーッとしたおとなもいたようでした。その虫がさなぎに変わって、二本の糸を胸につけて反り身に支えているのは、あいきょうがありました。わけて印象的なのは蝶の誕生です。羽をたたんだままの蝶が少し姿をあらわしました。子どもたちの見守る中で蝶は長い間じっと休んで羽をとじていました。やがて箱の中をとびはじめ、ふたをとると、とび立ちました。

「ああ、よかった。」

「あばね。あばね。」

口々によぶ子どもたち。それから後

「あの蝶が私の家へあそびにきた。」

という報告が次々に語られました。雨の日に生まれ出た蝶には、晴れるまで宿をかすといつて、子どもたちの心配はたいへんでした。

幼稚園時代には、昆虫針は不要と考ええます。とんぼも、せみも、ばったも、夕方に

は自分の家へ帰りたいのだからと、外へ放すように仕向けてまいりました。

## 終りに

兎やひよこがこれ以上大きくならないと思ったり、死ななければいいと思うこともあります。しかし私はあわてて自分の考えを訂正します。育つからこそ生命なのだ、死ぬからこそ生命なのだ、と。

子どもたちが抱けば体温もある。逃げもするしひっかきもする。おしっこもかかり臭くもある。小さい生命が刻々成長し変化している。そして思いがけない時に死がやってくる。それこそが生きものだ。幼児はかわいがり、あそび、観るうちに、生きものの生命を実感でつかむでしょう。そして死を悲しむことに、こんどこそ、生命をもっと大切にしようと思ふことでしょう。幼稚園の小動物飼育の経験を通して、こうしたことに思いがたりました。

(群馬大学付属幼稚園)